

緑地新聞

5

2019年1月発行

落ち葉から循環させる



十二月一日(土)、本プログラムから八名の大学生が参加し、竹林整備活動を行いました。今回の活動内容は、松木日向緑地の竹林整備をするこ

と・以前作った竹炭を用いたBBQを通して親睦を深めることでした。朝の九時半に十三号館の前に集合し、準備体操をすることから今回の活動が始まりました。その後すぐに加藤先生(本学理学部生命科学科)から、竹の性質や加藤先生が緑地内で行っている研究の内容等について、お話がありました。加藤先生が整備しているエリアと、あえて手を加えていないエリアとでは、入ってくる光の量が異なっており、竹を切ることの重要性を実感させられました。あえて手を加えていないエリアでは、竹以外の植物が減少したり、人間が入っていけないような状態であったりする等、この活動がなければ本学の

自然環境課題が深刻化してしまうのではないかとという危機感を抱きました。

次に、落ち葉を撒く作業を行いました。緑地内に落ち葉という布団をかけることで地面に栄養が行き渡り、来年美味しい筍が生えてくるようになります。地面一面が黄色や紅色になり、とても綺麗でした。一部落ち葉を大盛りにした場所があり、来春そこがどうなっているのかについても今後観察していきます。学内で出た落ち葉を業者に委託しゴミとして処理するのではなく、学内で消費することは、緑地の再利用のサイクル形成において大切な作業です。

その後は、いつも通り竹のあるエリアに行って竹の間伐作業を行いました。一人一三本程度の竹を切りました。久しぶりの作業であったためメンバーからは、切り方を掴むのが大変だったという感想が上がりました。一人で大きな竹を切るのは体力を使います。自分の切り倒した竹で誰かが怪我をしないように、切り始めと倒す際の掛け声を忘れないように心がけました。切り倒した竹は適当な長さに切って枝を落とします。



緑地に来た人がつまづかないために最後までしっかりと竹の処理をしました。

今回の活動の最後には、自分たちでかまどに詰めて作った竹炭を用いてBBQを行いました。プログラムメンバーと一緒に肉を焼いたり、焼きそばを作ったりする時間は楽しくあつという間で、親睦が深まりました。年齢も学部もバラバラで、ひなた緑地遊学会の方とは、ボランティア活動をしていたり知らず知らず合わなかったかもしれない。そのような方たちとお話をするのは貴重で、緑地での活動を通じて人と人との繋がりが出来たことに幸せを感じました。竹にパン生地を巻きつけてパンを焼いたり、学内で採集したキノコを焼いて食べたり、このプログラムならではのBBQになって有意義な時間となりました。

今回の活動を通じて、竹を切って自分たちがその土地をどうしたいのかについて少し考えるようになり、竹を切るといふ作業だけでなく、増えすぎて人の手が入らない竹林を見て、切った後にそれをどう活用するかも考えていくことも必要だと感じました。環境保全に取り組みたとともに、人と人との繋がりを強く感じられた一日でした。



松木日向緑地プログラムとは

首都大学東京の奥地に存在する松木日向緑地で毎年九月から、月に一度程度、社会課題(下記参照)の解決を目的に学生主体で竹林整備の活動を行っています。さらに、伐採した竹を、利活用し、近隣地域の方々との交流等へと役立てています。

プログラムの中には、ボランティア活動の意義や社会の課題、背景を学ぶ事前学習と活動を多角的に振り返る事後学習があり、通常活動である竹林整備と連動した内容・構成になっています。

社会的課題

- 環境：里山荒廃による生態系への悪影響
- 文化：自然利用の技術・文化伝承の断絶
- 地域：少子高齢化に伴う世代間交流やコミュニティの希薄化
- 大学：豊かな緑地資源に対する認知度の低さ

緑地川柳

緑から
つながりつくる
ボランティア

編集後記(物理・2年 shikawa)

今回の活動では、加藤先生が来てくださったということもあり、今までで一番学びが多かった活動だったなと感じました。大学にある緑地だからこの活動をこれからも充実させていきたいなと思いました。

編集発行
文章担当

首都大学東京ボランティアセンター (南大沢キャンパス 一号館一階)
電話 〇四二一六七七・二三五四 メール tnu-volunteer@tnu.ac.jp
地域ボランティアプログラム①「松木日向緑地プログラム」メンバー 法学部一年・〇